

---

# 惨殺！デュラ娘

ソードー鉄道員

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

惨殺！デュラ娘

### 【Nコード】

N3935BA

### 【作者名】

ソドー鉄道員

### 【あらすじ】

幻想郷に見習いデュラハンの女の子が幻想入り？

名前が単純で天然ボケ拔群のデュラ娘がドタバタ成長していく笑い  
と感動？の成長日記、イカ娘とは関係ない。

断じてイカ娘とは関係ない（大事な事なので2回言いました）。

## 惨殺！0話「やってきた見習いデュラハン」（前書き）

ゆっくりれいむ

「どうも、どうも、ゆっくりです。

さて始まりました、惨殺！デュラ娘。

と言うか、第0話から使いまわしかよ……。

あ、言い忘れてました」

＊この小説は東方project、トランスフォーマー、ローゼンメイデンの二次創作小説です。

キャラのイメージや設定が大きく崩れる事がございます故、ご了承ください。

後、オリ主なので、苦手な方はブラウザの戻るボタンを押してください。

ゆっくりれいむ

「それが苦手じゃない人は……ゆっくり読んでいてね!!!」

## 惨殺！0話「やってきた見習いデュラハン」

「まったく……ゆっくりはいつもいつも……」

縁側で愚痴を呟いているのは、ゆっくりれいむの主である霊夢だ。それもそのはず、普段ならのほほんと茶を啜っているのだが……いつもに増して不機嫌である。

「まあ、お前に似てるいからじゃないか？」

そしてその愚痴を聞いているのは、ゆっくりまりさの主である普通のこと泥

……じゃねーや、普通の魔法使いの霧雨魔理沙だった。

「オイ、誰がこそ泥だよ？」

「すみません、つい……。」

「誰に話してるのよ？」

「気にするな！」

いきなり独り言を言う魔理沙に対して呆れた顔をしながらいう霊夢だが、気を取り戻して愚痴が続いた。

愚痴の内容は、もちろんゆっくりれいむに対する愚痴だった。

彼女は霊夢が戸棚にしまったおいた高級な饅頭が変化した妖怪であるが……性格と表情は違えど見かけからして霊夢そっくりである。

いつものように魔理沙はその愚痴を軽がると「はいはい」と返事をする。

だが、霊夢の愚痴はまだ収まらなかった。

「掃除はサボるわ、着替えを覗くわスカートをめくるわ!。」

いくら楽園の素敵な巫女でも我慢の限界ってものがあるわよ! おかげで参拝客が来ない……」

「いや、参拝客が来ないのはゆっくりのせいじゃないぜ…… (汗)」

最後の愚痴に関しては魔理沙の言うとおりのゆっくりれいむとは関係が無い。

参拝客が来ないのは、ここ博麗神社は幻想郷の最東に建てられているからだ、周囲には妖怪が出る森なので…行こうにも行けない。だが霊夢の人間・妖怪問わずに惹きつける性格にも参拝客が来ない理由もある。

そのおかげで博麗神社には全く、里の人間の人っ子一人は来ない……来るとしても妖怪や賽銭箱に石ころや蛙の死骸を入れる悪戯好きな妖精だけだ。

更に最悪なことには、自分の顔をした妖怪饅頭「ゆっくりれいむ」が居候してしまったことで霊夢の悩みは増えるばかり……。

「ああ……あんなに美味しい美味しいお饅頭が…三日間でゆっくりに変化したのよ?。」

とっても高いお饅頭なのよ……あんこがとろつとしてて頬っぺたが落ちそうなくらいだったのに……」

そう言って霊夢は泣きながら魔理沙を揺すった。

未だに饅頭の味を忘れられないらしい。

魔理沙は揺すられながら、「まだ饅頭のことを嘆いてたのか…」と心の中で呟いた。

ちなみに、彼女の家にも自分の顔をした妖怪大福のゆっくりまりさが居候している。

あまり普通の味だったので、魔理沙は食べ残したまま二日で変化した妖怪である。

……と、その時である。

「号外です！」

声とともに少女は新聞をばら撒き、霊夢たちのところへ急降下した。

「おはようございます。清く正しい命射丸です、今日の号外です」

そう言う少女……他の妖怪よりもプライドが高いとも言われる鴉天狗の一人の射命丸文は敬礼しながら名乗って霊夢に文々。新聞を渡す。

霊夢は新聞を受け取ると早速記事を読んだ。

「えーと何々、『衝撃！幻想卿に新たな訪問者！』……また外来人が来たって事？」

「はい、どうやら今度は人間の少女っぽい人なんです」

「っぽいって何だよ……」

新聞を読んで、また外来人が来たと思うと霊夢はため息を吐く。ここ最近、外の世界から幻想卿にやってくる者が数多くあった。

去年はソドー鉄道一号機関車のトーマスがこの幻想卿にやってきてしまったことがあるからだ。

だけど、なんとか彼は無事にソドー鉄道へと帰っていったが、今

度は誰が来るのか：いや、誰が連れてこられるかわからない。  
というより、ここ最近人間ではなく人外系ばっかだった。

ゆっくりりれいむだけでもイライラしているのに外来人が来たのに  
もイライラする。

新聞を読み終えた霊夢は折りたたんで、テーブルに置いた。

普段なら読み終えたらゴミ箱に投げ捨てるのだが、これを見た文  
は魔理沙はありえない表情で見っていた。

「お、おい霊夢！お前どうしたんだ！？」

「は？何がよ？」

「あやや！？霊夢さんにしては珍しいですよ！？、新聞を捨てるこ  
とに定評のある霊夢さんが！」

「どんな定評よ！！、この新聞はゆっくりりが読みたいからとってお  
くだけよ！」

「アレ？ゆっくりりさん、まだ帰ってこないんですか？」

文はゆっくりりれいむの事を聞くと霊夢は縦にうなずいた。

この文々。新聞を楽しみにしているのは紅魔館の主であるようじ  
よ……じゃなかった、吸血鬼レミリア・スカーレットとゆっくりり達  
であった。

特にすごく楽しみにしているのはゆっくりりれいむである、文々。  
新聞を購読のしているはゆっくりりれいむ一人だけ。

料金もゆっくりりれいむが払っている、外の世界で実況しているの  
でへそくりをどこかに隠しているからである。

「まったく、私に黙って購読なんて居候の分際で何考えてるのよ」

「まあいいじゃないですか。こうして購読してくれる人が居ますし  
…」

「それはあんたにとってではでしょ……それにゆつくりは人じゃないでしょ」

そう突っ込むと霊夢は「あゝあ」となだれ込む。

ちなみに文とレミリアのところにもゆつくりが居る……しかしこちらら饅頭ではなく肉まんやあんまん、ピザまんが変化したものである。

「でも、なんかかんやでゆつくりと仲いいじゃん」

そう言いながら霊夢の隣で酒を飲んでいたのは上級妖怪の鬼の少女……違う違う、少女……小さな百鬼夜行の伊吹萃香だった。

「なあ！、す、萃香！？」

これには霊夢は頬を赤くして動揺する。

そんな鬼の発言に敏感に聞いた文と魔理沙は質問をする。

「ほほお、ゆつくりさんと仲がいいのですか……」

「萃香、私にも詳しく聞かしてくれ！」

「そうだねえ……最近、ゆつくりの奴が帰ってこないときに「早く帰ってこないかな」と心配していたし……」

寝言で「ゆつくり」と言っていて……」

「わーわーわーわー！！！」

鬼は嘘が嫌いなので正直に話す、霊夢は顔を真っ赤にして両耳を塞ぎながら叫び続けた。

こんな霊夢の姿を見るのははじめてなので、文はこっそり写真を撮った。



萃香の話聞いて霊夢を見ながらニヤニヤする魔理沙。

「ちち、違うのよ！ご飯が冷めちゃうからそう言ってるだけよ！それにあいつが居ないと枕代わりが……」

霊夢は動揺しているのか何を言ってるか自分でさえわからなくなっていた。

「おお、ツンデレツンデレ」

「ツンデレ言うなー！！」

とどめにウザい顔をしながら文が言うと、霊夢は顔を更に赤くしながら怒鳴った。

もう湯気がもわもわと出ている。

「でもねー、ゆっくりだって霊夢や神社のことを思って参拝客が来るように努力しているよ」

「萃香ア！あんたもいい加減に……って、えっ？」

もう一度怒鳴ろうとしたが、ゆっくりが神社のためにがんばっているという事を聞いてピタッと止まった。

更に萃香は話し続ける。

「あいつは結構、怠けているけど、ちゃんとこの神社や霊夢の事を思っているんだよ。」

私が屋根の上で昼寝していたときに、ゆっくりが参拝客を連れてきてるのを見たんだよ」

「ほほう、私達の見えないところでそんなことをしていたんですね」

「ゆっくりって結構働き者だね……あ、そういえばこの前の話だが……」

今度は魔理沙が話し始めた。

その話は魔理沙がいつもの様に紅魔館に侵入し、大図書館から本を強奪した後に神社の石段を登っているときだった。

彼女は、森の中で何やら怒鳴り声が聞こえてきたので、様子を見てみると……。

「アレはゆっくりじゃん、って何だあの妖怪共？」

森の中では、ゆっくりれいむが2匹のとても大柄でごつい妖怪たちと話していた。

だが、何やら様子が変わった、ゆっくりれいむが何か怒っているのだ、もしや戦うのか？と魔理沙は首を傾げたが……。

「この……バカッ！！！」

一人の妖怪を殴った。

あんなにごつい妖怪がいつも簡単に小さいゆっくりれいむに殴り倒されたのはありえないが、

彼女は霊夢のそのものそっくりなので能力も強さもちよつとアレンジしてあつて強いのである。

殴り倒した妖怪の胸倉を掴んでまだ怒鳴っていた。

「アレほど参拝客には手を出しちゃだめって言ったでしょうが！」

「す、すみませんゆっくりさん。俺……どうしても子供らに飯食わせたかったんですよ……」

「私がキノコ料理を作つてあげるわよ！。別にあんたが退治されても私はどうでもいいのよ」

そう言ってゆっくりれいむは妖怪を突き放した。

どうやら、この妖怪は自分の子の為に参拝客を襲ったのである。それを見た毛玉から聞いたゆっくりれいむは怒っていたのだ。

神社の信仰、霊夢の事で思いやりがある為、それが許せなかった。そして居場所を突き止め、今の現状に至るのであった。

妖怪はただ黙って見つめていたが、ゆっくりれいむは悲しそうな顔をして、その妖怪にこう言った。

「でもね……あんたが紅白の巫女に退治されたら、誰があんたの子供の面倒を見るのよ？」

「お、俺がバカでした……グスッ」

「ゆっくりさんは誰よりもお前やお前の家族のことを心配してんだぞ！」

「（……盛り上がってる……）」

なんか某不良高校漫画みたいな流れであるが、魔理沙は気にすることも無かった。

しかし、ゆっくりれいむの意外な行動を見てちょっと驚いていた模様だった。

「……と、まあ、そんなことがあったんだぜ」

「あややや！貴重な意見、ありがとうございます。」

次の記事はコレですね！「ゆっくりれいむ！博麗神社の参拝客を助ける！」と……」

そう言って魔理沙の話は終わった。

早速、パパラッチは文花帳を取り出し、その事について書いて書いた。

霊夢はと言うとちょっとだけ微笑んでいた、普段は怠けて掃除サボって、着替えを覗いて、腋を舐めたりスカートをめくったりしているばかりのゆっくりれいむが神社のために参拝客を増やしていることを……

最近になって思えば、以前よりは参拝客が来るようになった。

ゆっくりれいむはただの疫病神ではなく、本当は幸せを運ぶ妖怪と思い始めた。

「(…ったく、余計なお世話ばかり…)」

……が、次の萃香の一言でこの思いは崩れ始める。

「でもね、参拝客の中にはスタイル抜群の女性にセクハラしたりもしたのもあったな」

「……………」

オーケー、前言撤回。

やっぱあのアホ饅頭は疫病神よ!!。

霊夢は心のそこからそう呟いた。

自分で参拝客を減らすような行いをしているゆっくりれいむにかなりの怒りのオーラを出していた。

これを見て、魔理沙たちは若干、顔面蒼白になって霊夢から一步引いた。

その時、石段から、人影が見えた。

人のようだった、しかし……参拝客にしてはどうもおかしかった。

両手に担いでいるのは、大きなたらいだった。しかも息切れして  
いてハアハアと喘いでいる。

「なあ、アレって……まさか」

魔理沙が呟いたその瞬間、霊夢は真っ先にその人影まで走って  
いった。

「オイ！霊夢！待て！、あいつは！」

いきなり走り出した霊夢に魔理沙は止めようとしたが、時すでに  
遅し。

何故、走り出したのか不明であったが、文はぽつりと呟いた。

「おそらく霊夢さん、あのたらいの中にたっぷりとお賽銭を入れる  
お金があると勘違いしたのじゃないでしょうか？」

「あー、最近、お賽銭を入れる人少ないからね」

文の呆れた一言に、萃香は同情した。

一方、霊夢はと言うと、猛スピードで走って、その人物の目の前  
で止まった。

すると、顔を上げると満面名笑顔で……

「ようこそ！博麗神社へ……」

ザバアアア！！

何かをぶっかけられた、それも赤い液体である。

ぶっかけられた霊夢は何をされたのかポツンと佇んでいた。

一見、血に見えたが、ほんのり甘い香りがしているのでトマトジ

ユースだった。

魔理沙達も霊夢に近づいてそのぶっかけた人物を見た。

さらさらしていて綺麗な青色のロングの髪で、単発ズボンで柄の入った服を着ていて。

顔はかなり可愛い分類に入っている、目は赤と緑のオッドアイ、スタイルはかなり良く、胸は西行寺幽々子、八雲紫、八雲藍には負けるが中ぐらいである。

文はカメラを持って撮り続け、萃香はその少女の胸をじいっと見ている。  
ていた。

そして魔理沙は驚きを隠せずに口をパクパクしていた。

若干、たらいを持っているただの少女であるが、人間とは思えないところがあった。

少女の首が、ちょっとだけぐらついたのである。

ぐらぐらする頭を少女はあわてて押さえた。

「お、お前まさか……死を呼ぶあの……」

魔理沙がそう言おうとした時に、霊夢からかなりの殺気が出ているのに気づいた。

そこには、ワナワナと怒りと殺意が入った鬼巫女の姿があった。

ゆっくりれいむの傍若無人やセクハラ行動、そして中々来ない参拝客、更にはたらいにいっぱい入ったトマトジュースをいきなりぶっかけられる……

などと霊夢の顔がかなり怖い表情になっていた。

こんな姿の霊夢はかなり初めてである、魔理沙たちはあわわわわ

…と震え上がり、霊夢から離れた。

ぶっ  
かけた少女もかなり震えていた。

次第に、ワナワナと震えていた霊夢は口を開いた。

「ねえ、あんた……」

「ヒツ……！」

霊夢に声をかけられ、少女は更に震える。

「この博麗の巫女であるこの私に、トマトジュースをぶちまけるとは……いい度胸しているじゃない？」

...

もう今にも爆発しそうな霊夢に、魔理沙たちは何も声をかけない。

否、声をかけられなかった、声をかけたら自分たちまで殺しそう  
なぐらい恐怖が正に霊夢から出ているのだ。

少女は、何かハツとして、**霊夢にこう言った**

「……ん」

「い？」

「……ごめんなソーリー……」

その瞬間、博麗の巫女が鬼巫女に変化し、綺麗な弾幕が頭がぐらつく少女に浴びさせられた。

お空には、綺麗にぶっ飛ぶ少女の姿が……。

……それが、デュラハンの見習い少女デュラ娘と、霊夢たちのフ

アーストコンタクトであった。



## 惨殺！0話「やってきた見習いデュラハン」（後書き）

ゆっくりれいむ

「おいバカ作者、これ使いまわしだろ!？」

ソドー鉄

「いや、あの…実は新規で書きたかったのですが、時間の都合上書くのに間に合いませんでした」

ゆっくりまりさ

「じゃあクイズ小説の方に連載してる奴はどうすんだ？」

ソドー鉄

「デュラ娘を連載してしまったので消す事にします。

次回からデュラ娘の話はこちらで連載していく方針です」

ゆっくりれいむ

「ふう…だから貴方はバカ作者なのよ、これだから感想も少ないのよ」

ソドー鉄

「ほっといってくださいよ!!。」

取り乱しましたが、次回に続きます」

デュラ娘

「…………次回、惨殺！1話「幽々子と妖夢との出会い」…………  
リリカルデュラデュラ…がんばりm…あっ…（ポロツ）」

**惨殺！1話「幽々子と妖夢との出会い」(前書き)**

ゆっくりれいむ

「どうも、ゆっくりれいむです。

デュラ娘のあらすじ」

デュラハンが飛びました。

ゆっくりれいむ

「以上です」

霊夢

「ちゃんと説明しなさいよ」

ゆっくりれいむ

「じゃあ、霊夢に白い液体をぶっかけ…」

霊夢

「今日からご飯抜き！」

ゆっくりれいむ

「な、なんだとおおお!?」

## 惨殺！1話「幽々子と妖夢との出会い」

＞ザッ……ザッ……＜

白玉楼の庭で、箒を掃いてる音が聞こえる。

落ち葉を掃除しているのは、銀髪で緑の服を着ている少女であった。

彼女の名前は「魂魄 妖夢」、白玉楼に住む主「西行寺 幽々子」の庭師でもあり、護衛役兼剣術指南役ある。

だが、彼女は人間であるが……人とはちょっと違う。

それは周りにふわふわ飛んでいるお餅みたいなのは幽霊だ、妖夢は半分が人間、半分が幽霊のハーフである。

この様に人間と幽霊のハーフの事を「半人半霊」と呼ぶ。

また、腰には長刀「楼観剣」と、短刀「白楼剣」を帯刀している。

「ふう……ここの掃除はこれぐらいかな？」

掃除を終えると、妖夢は一息を吹いた。

……が、そう思っていたのもつかの間……また落ち葉が散っている。

「はぁ……」

これにはため息をつきたくなるが、再び落ち葉の掃除を始める。誰でも経験したことがあるだろう、いくら庭掃除をしても、すぐに枯れ葉が落ちて……

何回も何回もやってもキリが無いのだ。

掃除しているときに、ふと彼女は空を見上げる。  
すっかり、夏の暑い空が終わり……秋の終わりの近づいてくる。

「今年はグッと冷え込むのかしら？」

空を見上げ、冷たい風を浴びながらそう呟いた。  
こんな寒い日には暖かいものが食べたくなるのだが、妖夢はそんな主の事を想像しながら微笑む。

「（今夜の夕食は鍋物にしようかな）」

そして、掃除を終えて夕食の準備に取り掛かろうと屋敷に戻ろうとしたとき……。

>ドッゴーーーン！！！！<

「みよんっ!？」

いきなり背後から何かが落ちた音に奇声を上げる妖夢。  
ちなみにこの「みよん」が、一部のファンからは「みよん」と呼ばれる由来であった。

え？、そんなの関係ないから進めろこのどスケベ野郎って?……  
はいすいません。

「な、何?。さっきの音……後ろから？」

音に反応して妖夢は後ろを振り向くと……そこに居たのは砂埃が舞っていてよく見えない。

侵入者か?と考え、帯刀してあった「楼観剣」を抜き構えながら

様子を見る。

……やがて砂埃が晴れ、妖夢はその落ちた場所を確認した。  
すると、そこには一人の少女が目回して倒れていた。  
少女の姿はひどいやけど傷を負っていて服装もぼろぼろだった……  
……コラそこ、いやらしい想像しない！。

「ひ、人!？」

目を丸くして驚く妖夢。

だが、人間ならば人間の気配があるのだが……彼女からは人間の  
気配ではなく、妖精の気配だった。

だが、何故この少女はこんなにボロボロになっているのか……？、  
妖夢は気になりながらも少女に駆け寄り、起こそうとした。

「大丈夫ですか？、しっかりして……」

そう言っ、妖夢は彼女を持ち上げると……

ポロッ ゴツン

「……デユラ……」

首が落ちた、もう一度言う……首がポロリと落ちた。

それとも簡単に首が取れたのだ、しかも取れた首からは血が  
ドロドロと流れ出ていない。

血の代わりに、首の根元から黒い煙がモクモクと吹き出していた。

「……………」

サーーーーッ……

それを目撃してしまった妖夢の顔から血の気が引いて青ざめた。  
実は妖夢は半分が幽霊なのに……お化けや怪談話が苦手である。  
あろうことか、あのゆっくりにも怖がる（本人はゆっくりれいむ  
の嘘で生首だと思っている）始末であった。

でもそんなところがみよんの可愛いところである……みよんかわ  
いいよみよん、かわいいぜ……。

おっと、失礼しました。話がずれてしまいました。

少女の首がポロリと落ちたのを間近で目撃した妖夢は……

「く、首……首首ががが……（クラッ）」

ドサッ

思わず気絶してしまった。

気を失ってから、何時間はたったのだろうか？。

そう思いながら少女——デュラ娘は目を開けた。

「……ん……ここは……？」

目を開けるとそこは、どこかの建物の中だった。

どうやら誰かに運ばれて、建物の中に入れてくれたのだろう。

デュラ娘は起き上がる、しかも布団まで敷いてくれていたのだ。

「……広い……」

>スーッと

「失礼します」

辺りを見回すと、結構広かった、和の空間を持つ部屋にしてはちよつと広い。

その時、ふすまを開ける音とともに妖夢がお茶を乗せたお盆を持つて入ってきた。

「気が付きましたか？」

「……………」

妖夢の問いかけにデュラ娘はコクコクと頷く。

「そうですか…」と妖夢はちよつと安心して、淹れたお茶を彼女に差し出す。

デュラ娘は湯飲みを受け取って、お茶を美味しそうにする。

「……………美味しい…こんなに美味しい…お茶を飲んだの…はじめて…」

「いえ、普通に淹れたお茶なので…………でも、びっくりしました。いきなり人が落ちてきたかと思いましたので…」

「いやいや、彼女の首が取れたところを見て気絶したあんたが言うか!。」

若干、妖夢はデュラ娘をまだ人間として見ている、首が取れることを現実逃避しているとか絶対に言っではいけない。

「…?…………私…人間じゃないよ?…………」

人と言う言葉に反応したか、デュラ娘は首をかしげて人間と言うのを否定した。

だが、妖夢はちょっと乾いた笑いをしながらデュラ娘の回答を否定し続ける。

何度も説明しているのに問うの妖夢は、いまだに否定し続ける。全然信じてくれないのにプクーツと頬を膨らませたデュラ娘は、一旦湯飲みを置いて自分の頭を掴み……

＞スポック

自分の首を取った。首なしニックですか？……いいえ、デュラハんです。

信じてくれないのならば、自分の特徴を見せて信じ込ませよう！と言うデュラ娘の意地であった。

「…これでも……私を人間だと思う？……」

首を手を持ったまま妖夢に見せる。

さて、当の妖夢はと言うと……

「見えない見えない見えない見えない見えない見えない……（涙目）」

涙を流しながらデュラ娘からそっぽを向いていた。誰だって首が取れるのを見たらそれはそれで怖い。

全然見てくれないのにムツとして、更に首をグツと近づけさせるが……

涙目でプルプルと震えている妖夢には全然通じず、ただ泣いているだけであった。

さすがに可愛いそうになってきたか、デュラ娘は自分の首を身体



にくつつけた。

まだ震えている、妖夢に思いつきり謝った。

「……ごめんなさい」

普段の彼女ならば、ここで寒いギャグを言う癖があるが……

霊夢に吹っ飛ばされたのを学習して、今回はキチンと謝った。

こんなに怖がらせるのはデュラ娘にとっては一番したくないことなのだ、デュラ娘の表情は曇りつつ、泣きそうになる……

………ところだった。

ムギユツ

「ひゃっ!!」

「だめじゃない、人の庭師を怖がらせちゃ」

突如、デュラ娘の背後から美しく色っぽい声とともにいつの間にか羽衣のような服を着た女性が現れ、抱きついてきた。

これには思わずデュラ娘は声を上げる、

しかし女性——白玉楼の主にして西行寺家のお嬢様……西行寺 幽々子は抱きついたまま、デュラ娘の耳の近くにまで声をかける。

「あら、意外と可愛い声出すわね。しかも抱き心地も良いし……このまま食べちゃいたい」

「ふえっ!?!?／／／」

何をとち狂ったのか、幽々子がデュラ娘に抱きつきながらそんなことを言ってきた。

自分が抱きつかれるのはものすごく恥ずかしいデュラ娘だが、食

べられるの意味を理解して顔を真っ赤にする。

このまま百合で甘々なエロ展開になるのか？と思う人も居るが…  
…そんなことはなかった。

今までずっと顔を背けていた妖夢が我に帰って、幽々子がデュラ娘にちよっかい出しているのを見て止めたのだ。

「幽々子様！何やってるのですか！？」

「うふふ…冗談よ冗談」

「全く…」

幽々子はクスクスと笑いながらデュラ娘から離れて、扇子を開いてパタパタ扇ぐ

もう慣れたのか、妖夢は呆れながら言って、顔を真っ赤にしてるデュラ娘を宥めた。

声は出なかったが、デュラ娘はまたもや縦に頷いた。

「妖夢」

「は、はい」

そんな中、幽々子は真剣な表情で妖夢に声をかける。

妖夢はすぐに反応をするが、幽々子はジッと真剣な表情で妖夢を見つめるだけだ。

デュラ娘を屋敷に入れたのがまずかったのか？と考えるが……予想は遥かに崩れた。

「お腹すいた〜、ご飯作って〜」

ズコー

さっきまでのカリスマはどこへやら、のほほんとした表情でそう答えた。

これにはさすがの妖夢もズッコけた。

「ああ、やっぱりいつもの幽々子様だ…」と心の中で呟き、夕食の準備をすることにした。

…と、そんな中…

>キュルルルル…:キュルキュルキュル…:<

庭師と亡霊の会話を跨ぐ様に、可愛らしい腹の音が聞こえてきた。2人は誰の腹の音なのか首を傾げたが、すぐにその音の原因を見る。

「……………  
／／／  
」

もじもじしながら鳴る腹を押さえながら茹蛸の様に頬を赤くするデュラ娘の姿があった。

しかし、それでもこれでもか!と言わんばかりに彼女の腹の音は鳴り響く。

恥ずかしさの余り頭から湯気が出始める。

「あの、夕飯…一緒に食べませんか?」

「モクモク……やっぱり寒い日はお鍋よね」

「今夜はグツと冷え込みますからね」

夕食の時間、鍋をつつきながら会話する2人。

グツグツと煮込みながら美味しそうなもつ鍋である。

しかし、このもつ鍋、どこも無くおかしい部分があった。

……それはと言うもの……

ドドンツと言う効果音が出そうなぐらい鍋が大きいのである。

いくら幻想郷だから常識に囚われないからってこれはないだろ……

……しかし、幽々子の食欲は普通サイズのもつ鍋では収まらないのだ。普通サイズだったら、駄々をこねてもっと食べたがるのだ、これに悩んだ妖夢は大サイズの鍋を買ったのだ。

え？、そんなに大きな鍋は売ってない？……だから幻想郷では常識と言うものは（以下略）

「妖夢くおかわり」

だが、当の本人である幽々子はそんな事を気にせずに妖夢に茶碗を差し出す。

これでもう29杯目である。

「幽々子様、もうこれで29杯目ですよ……」

「もつ鍋が美味しいからご飯が進んじゃうのよ」

いや、いくらなんでもご飯進みすぎですよ……と突っ込みを入れたいの山々だが……

茶碗を受け取り、ご飯を盛る。

渡された幽々子は再び、鍋をつついてご飯をモクモクと食べ始める。

妖夢は、この食欲を何とかなんのかと何度も考えていたが、今ではすっかり慣れ始めていた

だかしかし……幽々子のおかわりの回数を上回る者が居た。

「……おかわり」

デュラ娘がそう言って茶碗を差し出す。

今の所では、幽々子は29杯目に対してデュラ娘は33杯目である。

これには妖夢も絶句するばかりであった、否……あの幽々子でさえ驚く表情だ。

「あの……これでもう33杯目ですよ？」

「……………」

そんなに食べてたっけ？の表情をしながらデュラ娘は首をかしげる。

首が取れるのにどこにそんな食欲があるのか？……妖夢はそう思いながら茶碗を受け取ってご飯を盛ってデュラ娘に渡す。

デュラ娘も茶碗を渡されたら、再び鍋をつついてご飯を食べる。

そんな中、幽々子はデュラ娘に話しかけた。

「そのままでもいいから聞いて頂戴。どうしてあなたはうちの庭に落ちてきたのかしら？」

真剣な表情で幽々子がデュラ娘に問いかける。

デュラ娘も食べるのをやめて、茶碗を置くと、彼女の問いかけに答えた。

「……話は…長くなります……」

それは、霊夢に吹っ飛ばされた後だった。  
気を失っていたデュラ娘が目覚めると、妖精の森に落ちていたのだ。

辺りを見回しても、妖精が飛んでいた、遊んでいた、いた。

「大ちゃん！早く早く！」

「ま、待ってよチルノちゃん！」

中には追いかけてまわったりする妖精も居て、結構楽しそうである。

「……いいな…私も自由に遊びたい……」

実はデュラ娘も首が取れる体質であるが、妖精である。

だが、種族であるデュラハンは他の妖精たちとは違って姿も見せないし、

死を迎える人間に知らせるために夜中に走り回り、音に反応した人にたらいに一杯に入った血を浴びせるなど……

恐ろしい事に、姿を見られたらその相手の目を鞭で潰すのである。

元いた世界でも、彼女は人間からはひどく嫌われていて、いじめられる事が多かった。

そんな自分に嫌気が差し、自分を変える為に旅立ってきたのである。

デュラ娘は、自由気ままに暮らす妖精たちが羨ましくてしよ  
うがなかった。

「……さつき…トマトジュースを浴びせる人を間違えちゃったけど  
……まあいいや…」

それでいいのかい！というような突っ込み話ですよ、奥さん。  
だが、どうしたのだろうか、遊んでいた妖精たちが何か恐ろしい  
ものを見たような表情をしながら、次々と逃げていくではないか。  
先ほどのまでの賑やかさが消え、デュラ娘は何やら怖くなった。

どこか泊まる場所がないと……とにかくやばいと思ったデュラ娘  
は辺りを見回した。

すると、そこには古ぼけているが小屋があった。

「……今夜はあそこで野宿しよう……」

そう言っ  
て、デュラ娘は小屋の前まで近づいて、ドアノブを掴み  
ひねろうとした。

その時だった！、背後から……

>シューー……<

「シューッ！！」

発火音が聞こえた。

デュラ娘は発火音にビクツとすると、すぐさま後ろを振り返った。  
そこに居たのは……

まだら模様で緑色をした身体にぽっかり空いた目と口。  
小さな足が前後に一對ずつ生えている。

その妖怪は、デュラ娘に近づいて発火音を出していたのだ。  
目と目が合ってしまったデュラ娘は思わず呆然としてしまった。

これを読んでいる読者ならばお分かりであろう……

自爆する破壊と殺戮のモンスター「クリーパー」……匠である。

ここで、某アイドル育成ゲームの「目と目が逢う瞬間」を流してください。

さっきの発火音はクリーパーの自爆カウントだった！。

だから妖精たちはクリーパーが来ると気づき、逃げていたのだ。

「ヒッ…！」

デュラ娘もクリーパーがやばい…！と気づき、急いで小屋の中に隠れようとしたが時既に遅し……。

クリーパーの身体は白く点滅し、身体が徐々に膨らみ始め……

>BOOOOOOOOOOOOM!!!<

自爆した。

デュラ娘の居た小屋は見事に開放感がないとのリフォームにより、ただの木屑と化していた。

（BGM…TAKUMI／匠）

なんとこういうことをしてくれたんでしよう。



匠のすばらしきリフォームによって、何の開放感も無かった小屋が…開放感溢れるただの木屑となりました。

依頼主？の喜び？の声が聞こえてきそうです。bY…ゆっくりれいむ

これがやりかたただけだろうと声も多いので本編に戻ります。  
爆発に巻き込まれたデュラ娘は、吹っ飛ばされて今に至る。

「……………」

話し終えたデュラ娘の顔は青ざめ、プルプルと震えていた。  
完全にトラウマである。

彼女の話を聞いていた幽々子と妖夢も、デュラ娘にすごく同情していた。

実はこのところ、人里から離れたくない若者が相次いでいる。  
その多くの原因がクリーパーに襲われたからだ。

妖夢でさえ、クリーパーの洗礼を受けた経験もある。

ちなみに、霊夢と魔理沙に紫、あのゆっくりコンビでさえクリーパーには勝てずに洗礼を受けてしまった。

後、にとりも発明品をクリーパーに破壊されたという被害も出たのである。

……これでガストが居たら幻想郷滅ぶんじゃね？、やめて！想像するだけで怖い！。

確かに一晩泊まるだけで行くのは無理な話である。

クリーパーが居る限り、今度こそ彼女の命が無いのだ。それに今は夜なので、妖怪達から襲われる危険性が高い。

そんな中、いつの間にか鍋をつついていた幽々子が、口を開いた。

「じゃあ、ここに住むのはどうかしら？」

「…え？」

「みよん？」

幽々子の言葉にデュラ娘と妖夢はキョトンとした

何せここは白玉楼、人間が入ってはならない場所…冥界であるからだ。

死を迎える人間に死を知らせるデュラハンが住むのは持つての他だ。

「ゆ、幽々子様…いくらそれでも…」

「妖夢、考えなさいな」

妖夢が意見を述べようとしたが、幽々子のオーラに口籠る。

幽々子は、頬にご飯粒を付けながら扇子を開いて扇ぎながら話す。

「確かにこの娘を簡単に住まわせる訳にはいかない。

だけど話を聞いたように…今この娘を追い出せばクリーパーの

餌食になる可能性は高い…

もしもそうなれば仕方無い事…それならばこの話はお終い」

「……………」

妖夢は思わず、息を殺してしまった。

こんなに圧力のある幽々子を今まで見た事が無いのだ。

幽々子はご飯粒を取って食べると、デュラ娘に向けてこう言い放

った。

「さて、ここは貴女が決めなさい。

貴女はどうしたいの？……………ここに住むか、それとも出て行って……………独立するか？」

「……………私は…」

言い放たれたデュラ娘の心はもう決心が付いていた。

人里に言ってもその村人達から批判を受け続ける…かと言って、妖精の森に住み着こうとしても妖精たちは自分を受け入れるはずが無い。

デュラ娘は息を飲んで、落ち着きを取り戻し……………幽々子に向けて答えた。

「……………ここに住みます……………不束者ですが……………お世話になります…」

その答えに幽々子はニコツと微笑む。

「いい決意ね…でもここは厳しいところよ？、耐えられるかしら？」

「……………ご飯を食べさせてくれた……………家事なら私も……………出来ます……………」  
「そう……………」

彼女の心は本当に覚悟を決めていた。

働かざるもの食うべからず、デュラ娘にはその心をずっと刻み込んでいたのだ。

幽々子はデュラ娘の正直な目に、フフツと笑う。

「いいのですか？幽々子様」

「あら？、いいじゃないの……………結構賑やかになるしそれに……………」

「それに？」

ここに住む事になったデュラ娘に妖夢は心配し、住む事を許した幽々子に問いかけた。

幽々子は再び鍋をつつきながら、答える……そして、口を開き……

「だって、この娘。私と同じくすごい食欲なのが気に入ったから☆」

ズッコケーーーーー!!!!

妖夢はズッコケた、そりやもう特大に。

デュラ娘は落ちそうになった茶碗をあわてながらキャッチして、鍋がこぼれないように押さえていた。

「今日の妖夢はズッコケるわね」

「……うん」

「ズッコケさしてるのは誰ですか!？」

そう言って二人はまた鍋をつつきあった。

何気ない会話に妖夢は起き上がって思わず突っ込んだ。

すると、幽々子は何かを思い出したようにデュラ娘に話しかけた。

「そういえば忘れてたわ、自己紹介がまだしてないわね。

私はこの屋敷「白玉楼」の主……西行寺 幽々子」

「申し遅れました……私は幽々子様の庭師にして護衛役兼剣術指南

役の魂魄こんぱく 妖夢です」

2人はデュラ娘に自己紹介をした。

そして次は、デュラ娘が自己紹介をする番である。デュラ娘は茶碗と橋を置いて……2人に礼儀正しくお辞儀をする。

「……はじめまして……私は……見習いデュラハンの……デュラ娘むすめです……」

なんと単純な名前なのだろうか、実はこの名前は彼女の友人だったバンシーがつけた名前である。

彼女の名前を聞いた幽々子は思わず、言ってはいけないことを言ってしまった。

「なんだか、イカの娘の名前にそっくりね」

「ゆ、幽々子様！それは禁止用語ですよ！」

「……？」

確かに侵略をするイカとちょっと似てるが絶対に触れてはいけない。

妖夢も慌ててその件に関してはやめさせようとしている。

だが幽々子はそんなことも気にせずに……

「さあ、鍋の具を食べ終わったらお楽しみ雑炊よ」

「……雑炊……」

鍋の最後の楽しみである、雑炊をデュラ娘と共に食していた。

関係ないですが、皆さんは鍋のシメはうどんですか？ ご飯ですか？ それともパスタ？。

「(まあ、いつか)」

妖夢は主の行動にはちよつと呆れたが……

これはこれで良いと思った、そして新たに住む事になったデュラ娘を迎え入れる事にした。

今年の鍋は、とても賑やかな夕食となった。

---

月日が流れ、デュラ娘はと言うと……

「……よーむー……よーむー……♪」

「あの、そんなにくつつかれると掃除しづらいのですが…(汗)」

妖夢に一番懐いて、抱きついていた。

白玉楼にずっと居候している、家事も妖夢と一緒にしているのだが、雑巾がけは首が取れるのでできないが……

首が取れない仕事だったらやりこなしている。

「……今日は…一緒に寝よう……背中流しっこしよう……」

「はいはい」

抱きつかれて若干苦笑する妖夢だが、実は心の底からは妹が出来たみたいでかなり嬉しいのであった。

こんなに自分に抱きついてくれるのは、自分のことをとても頼りにされているからである。

いつも抱きついてくるので、自分まで照れてしまうのであるが…  
…幽々子にも抱きついてるので妖夢自身もやきもちを焼く事もある。

ただ……そんな妖夢も抱きつかれるものすごく困る事があった。

＞ポロツ＜

「……あ」

「いやあああああ！！首！！首がああああああ！！（涙目）」

首が取れるのだけは勘弁して欲しいところである。

しかし、デュラハンなので無理な話だった。

**惨殺！1話「幽々子と妖夢との出会い」(後書き)**

デュラ娘

「……匠…怖かった(涙目)」

妖夢

「分からなくもないですが、倒せない妖怪ですからね(苦笑)」

幽々子

「クリーパーって何味かしら？」

妖夢

「幽々子様!？」

幽々子

「もう冗談よ☆」

デュラ娘

「…ゆゆこおねーちゃん…涎…」

妖夢

「長くなりそうなのでここまですりやます。

次回、惨殺！第2話「紅魔館の吸血鬼とデュラハン」をお楽しみに」

デュラ娘・幽々子

「「リリカルデュラデュラ♪」」

妖夢



「気に入ったのですか…それ？」

デュラ娘

「……うん」

幽々子

「気に入ったw」

妖夢

「……（苦笑）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3935ba/>

---

惨殺！デュラ娘

2012年1月10日09時54分発行